OMM JAPAN 2020　安全管理マネージャーレポート

挑戦を謳う OMM は、アウトドアの安全管理としても挑戦的な大会である。参加者は自分自身で進路を決定する。主催が必ずしも把握することができない。そして、11 月中旬のスキーエリア（が多い）という過酷な条件。そして急斜面や水量の多い河川、あるいはクマも出る可能性がある奥深い森。最悪の事態も起こり得る環境である。OMM らしい挑戦を維持したまま、如何に最悪の事態を防ぐか。そこに安全管理チームとしての苦労も達成感もある。幸いなことに、参加者の皆さんの協働もあり、今大会も大きな事故もなく終えることができた。

昨年のイベント後のアンケートでは、OMM の安全管理、必須装備についてのプログラムの記載はほとんどの参加者から好意的に受け取られた。特に安全管理の程度は「適度である」が 95%に達している。これは私たちの安全管理に対する考え方を参加者の方々も共有して頂いたからこそだと言える。リスク回避になりがちな現代日本において、挑戦に伴うリスクを理解した上で受け入れている人がこれだけいることには、希望を感じる。今後も、挑戦の魅力とリスクのバランスという考えを参加者と共有し、協働していきたい。

テレインにおけるリスクの特定と評価

環境条件に大きく影響を受けるナヴィゲーションスポーツでは、開催場所によってリスクは異なる。OMM の発祥地 UK では、致死的で制御の難しいリスクはほとんどない。行動不能になった競技者がいても、ヘリによる捜索・救助で速やかに問題は解決する。一方、日本では UK にはない深い森と藪、クマが存在し、落石のリスクも UK よりも大きい。

また本大会のテレインでは、ディレクターレポートにあるように、やぶの濃い森、斜面は急峻で崩壊しやすい土壌が特徴的である。安全管理チームの仕事は現地に入り、これらのリスクを特定するとともに、その程度を評価することである。評価に応じて保有することができるリスクと回避すべきリスクを見分け、保有したリスクの中でも参加者が現地で制御できるものは注意喚起によって、安全を確保するというストラテジーを取っている。

特に今回は直前に降雪があった。幸いなことにイベント当日には雪は影響ない程度までに溶けてはいたが、直前の状況を踏まえ、参加者が感知し、制御すべきリスクを改めて情報として流した。今回、大きなけが・トラブルは発生しなかったが、一件、やぶによる目の負傷が発生した。今後も、一般的なアウトドアのスキルを高めるとともに、テレイン特有のリスクに対して常に注意を払う情報を提供する必要性を感じたとともに参加者がそれを活用することを期待したい。

安全管理上の特筆すべき事項

事故として顕在化しなかったものの、落とし物が多かったのは今年のイベントの特徴である。落とし物の多くはコンパスや雨具といった必須装備、また地図もあった。多くはやぶのテレインのためにザックの外ポケットに付けたものが落ちたのだと考えられる。ペアで行われるこの競技では一方が地図やコンパスを落としても、確かに大事には至らない。コンパスや地図を落とした人の多くは、バディーが主としてナヴィゲーションをしていたのだろう。

しかし、改めて考えてほしいことは、必須装備がなぜ定められているかという点だ。これらは一般的なこの時期の自然の中で通常想定できるトラブルがあっても確実に帰還する、あるいは身を守るためにある。身を守

れなかったあなたは、「自業自得」と割り切って静かに消えていくかもしれない。しかし、それで悲しむ人、あるいは生涯消えない後悔の念を抱く人がいるかもしれない。リスクマネジメントの肝は、装備でもスキルでもない。自分の行動がどのような結果をもたらすかへの想像力である。。

安全管理マネージャー
村越　真